

図書館だより

埼玉県立図書館

24号

朝顔市

歳時記によると、「朝顔時く」が春、「朝顔の苗」が夏、「朝顔・朝顔の実」が秋の季語となっている。朝顔を詠んだ例句には、

朝顔や晝は錠おろす門の垣芭蕉
朝がほや一輪深き淵のいる蕪村
朝顔や濁り初めたる市の空久女
と味いある名句が並んでいる。
朝顔はアジアが原産、日本には

中国から渡来し、白・紫・紅・藍・

縞・絞とまことに美麗で、漏斗型
の大輪は、早晩に開き昼前には萎
むという、儚い花の命である。

朝顔市と言えば、東京入谷は特
に有名で、七月十日前後の数日、
鬼子母神門前に露天市が開かれる。
鉢植の造り方としては、

あんどん造り・つまみ造り
西洋朝顔・つばめ朝顔・桔梗咲

朝顔などが喜ばれている。

下駄履の浴衣掛で、葎葉張の茶
店縁台に坐り、ラムネや心太を飲
食して、買ったばかりの鉢を下げ、
帰宅を急ぐ群衆の流れは、実に日
本的な風物詩と言えるだろう。

埼玉でも浦和の玉蔵院境内で、
朝顔市が開かれるとのこと、これ
が埼玉浦和の名聞にもなれば、と
願う一人である。
(鈴木)



(浦和市広報課提供)

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

武蔵野の歌人

折原 静 汀

幻の『嬰兒』をもとめて 戸辺 好郎

汽車とまり風のわたれば夏草の
いきれほとほと面かすめたり
蟬時雨沼には白く霧たちて浮藻
寂しく咲きあたりけり
物思ひ橋をわたればほそぼそと
向つが森にひぐらしなけり
はた／＼と雀おどしはゆらめき
て苗代ほのに青みこしかも
きりりきり夕かたまけてなく百
舌鳥のするどく響く空の底ひに
眼路はるか人と馬ゆく野中道薄
寂しく日に光り見ゆ
小夜深く人し思へばほろほろと
森の木の実のこぼるる音す

前掲の短歌は、昨年の夏、没後半
世紀振りに発見された、折原静汀（本
名源太郎）二十歳のときのものです。
『武蔵野の歌人折原静汀―『嬰兒』
をめぐる青年歌人たち―』（埼玉新
聞社刊）所収の作品である。
「事実上小説よりも奇なり」とか、
「父の遺稿を尋ねて三千里」の旅の果
て、奇蹟的に発見された幻の短歌雑誌
『嬰兒』のお蔭で日の目を見ることの

出来た本書は、静汀の短歌二百四十
六首のほかに、歌人小野勝美氏の論
考「短歌雑誌『嬰兒』に関する覚書」
を添えて、大正前期の同誌の同人並
びに寄稿家たちのプロフィールと作品を
も紹介しており、短歌史的にも、極め
て貴重な文献的資料となっている。
ところで、編者である私は、南埼玉
郡百間村（現・宮代町）村長折原源
太郎の三男として昭和五年に誕生し
たが、父は私が三歳の昭和九年一月
に三十八歳で病没し、その四月に次
女の久子が生まれた。次兄の昭男も
六歳であった。後年、私は千葉県野
田市の戸辺家の人となったが、没後
五十年ということ、暇にも残らな
い実父の事績を明らかにしたいと考
え、色々調べているうちに、「若く
して文学に志し静汀と号して小説や
短歌の創作に没頭していた」という
文学修業を裏付ける証言を得て、再
び実家を探したが、残念なことにそ
の片鱗すらも残ってはいなかった。
しかし、何としてでも遺稿を捜し出
したいと思ひ早速行動を開始した。



静汀は大正五年二十歳で、前田夕

まず地元の親戚知人を手始めに、そ
れからそれへと縁の糸を手繰り、訪
れた人は数十人。関西までも足を伸
し、懇かれたように図書館、古書店
巡りもした。併しながら、何分にも
会社勤めの私には、活動は日曜のみ
に限られ、その休みさえ冠婚葬祭
で潰れることがあり、折角のチャン
スを逸して、切歯扼腕することも厭
であったが、遂に歌壇の大御所である
原三郎先生のお宅で、父の作品が掲
載されている雑誌『嬰兒』と『詩歌』
に出会うことができた。正に「一瞬
の他、浮木に逢う」如き幸運であり、
その時私は、よくぞ巡り逢えたもの
だ、と言う強烈な感慨に、覚えす絶
句し、歎泣してしまった。そして、
ひとりでに溢れる涙を抑えようがな
かったのである。

暮の白昼社特別社友となり、『詩歌』
に作品を発表した。『詩歌』自選歌号
（大正6・6・15号）の自筆（小伝）
をみてみよう。

静汀と号す。明治三十年六月
日光下街道に近き、武蔵平原の
雑木林にかこまれたる小さき葉
家に生る。大正五年十一月白日
社社友となる。東京に故郷に漂
泊的生活を送る。

「日光下街道に近き」とは、南埼玉
郡下の旧百間村のことであり、静
汀は高小卒業後、地元役場に奉職、大正
五年二十歳のとき上京。翌六年六月、
原三郎らとともに、東京麹町区飯田
町に嬰兒詩社を設立、月刊短歌誌『嬰
児』を発行した。原三郎はのち東京
医大名誉教授となり、また『詩歌』の
最長老同人として活躍。昨年一月前
田透（夕暮の長子、『詩歌』を主宰し
宮中歌会始選者であった）急逝のた
め『詩歌』が廃刊されるや『青天』を
創刊、その顧問となつたが、この遺
稿集の序文を病床で綴り、昨年六月、
本書刊行十日後に病没された。

『嬰兒』の同人は、折原、原の外に、
馬詰文人（本名嘉吉、のち東京医大
学長）、帝劇女優の桜井八重子、安部
路入（東京医専教授、『蘆笛短歌会』
を主宰したが昭和十九年死去）、大出

迂人、堀口袋羅樹（のち西條八十主
宰『蠟人形』誌編集、阿部唯一（大宮
市普門院住職）がいたが、大正七年
には社友二百名、九支社をもつにい
たつた。なお執筆者として前田夕暮、
斎藤茂吉、若山牧水、喜志子、山田
（今井）邦子、原阿佐緒、三ヶ島霞子
が作品や短歌論を寄せ、外に熊谷武
雄、楠田敏郎、醍醐信次、飯田莫哀、
島崎竜童（菅浦町長龍寺住職）、植松
静香、吉沢晃がいた。この『嬰兒』
誌に拠つた当時の青年歌人については、
著名となった人たちが多かったが、
此れらの青年歌人群像については、
先述の小野勝美氏が詳しい解説を試
みている。因に同氏は、特に近代短
歌を専攻し、『原阿佐緒の生涯』『前
田夕暮研究』それに『若山牧水』など
の著書があり、『コスモス』所収、美
術団体「光陽会」会友である。

静汀は、津津と光あふれ、静謐感
のみなざる武蔵野の田園風景を、ま
た、たちねの母を、去り行くおみ
なを、そして友情を、愛惜の情を込
めて謳いあげているが、作品はすべ
て、繊細な感性に裏打ちされており
句うような抒情をあふれさせている。
それに加えて、二十歳当時、文学修
業のために上京し、時折、帰郷する
といった生活を送つていた静汀の作
品には、一所不在の悲しさが生む
（人恋しさ）や、人を愛するが故の
遣る瀬ないまでの（寂寥感）があふ
れていて、胸を打つものがある。
併しながら、静汀が現し世の、現し
身の生の証しを、短歌の世界に求め
て、青春を燃焼し尽しながら、なに
ゆえ忽然と筆を折つてしまったのか
という謎は、今日となつては解きほ
ぐす術もないが、清原孤高の天折歌
人の作品には、七十年振りに聞いた
アルパムの古写真を見るような、一
種の懐かしい郷愁を感じる。そして、
国木田独歩の『武蔵野』とか、徳富
蘆花の『自然と人生』を読む以外に、
往時の武蔵野の面影を偲ぶ縁も乏し
くなつた今日、清冽で瑞々しい静汀
の作品が、広く、永く、多くのの人た
ちに愛誦されてほしいものと願わず
にはいられない。

県内図書館めぐり

川越市立図書館

図書館の誕生は大正5年にさかの
ぼる。私立から町立を経て川越市立
図書館（大正11年 市制施行）とな
り待望の新館が（昭和59年）10月31
日にオープンした。地上3階地下1
階の規模は県内図書館随一であり、
「市民の生活に役立ち文化の向上」
をモットーとした図書館は多様化す
る学習要求に応えるため各種資料の
充実と利用の拡大を図っている。
図書館から遠い地域の方のため11
月から移動図書館による巡回を開始
し、これまでの配本所（公民館図書
室）での貸出しと合わせ、公平な市
民サービスを目指す構想が一步一歩
進んでいる。

概要

○施設 鉄筋コンクリート地上3階
地下1階 延床面積5,931㎡
1階 一般貸出室、児童室、対面
朗読室、移動図書館車庫
2階 郷土資料室、参考調査室、
貴重資料閲覧室、グルー
プ研究室、事務室



所在地 川越市三久保町2の9
TEL (0492) 220559

3階 展示室、視聴覚鑑賞室、
ホワイエロビー、読書室、
講座室（和室）、視聴覚ホ
ール
地階 駐車場 44台収容（地上
24台）
○移動図書館 1台 21駐車場
○配本所 3カ所
○所蔵資料 図書（児童書含む）18
万冊、AV資料（レコード、カセ
ット他）1,660点、新聞39紙、
雑誌231誌
※所蔵資料の特色
新井政毅、山田衛居両氏の収集によ
る貴重資料。松平大和守、周防守家
から寄託になった藩政資料等

埼玉の文学 埼玉の小説家

▽1△

大谷 藤子

埼玉の生んだ近代小説の代表的作家に大谷藤子がいる。藤子は明治三十四年十一月三日、秩父郡神村に生まれる。本名トウ、父与三郎、母ミノの四姉妹の四女である。小学校の頃から読書好きで創作に対する関心も強く、東京の私立三田高女を卒業後、東洋大学文科の聴講生になる。

昭和元年十二月に川越出身の海軍士官と結婚、広島県呉市で平凡な生活を送る。夫の職業柄、夫の留守がちな日々が創作心に向わせ、短篇を書いて投稿するようになる。永井龍男の編集した「創作月刊」に「待たれぬもの」(三年一月)、「薄暮」(四年四月)を発表、荒木魂の誘いで「芸芸尖端」の同人になり、「指」(四年五月)、「焦点」(四年六月)を発表。七年二月、協議離婚して上京する。八年九月に荒木の主唱で高見順、新田潤らと「日曆」を創刊する。荒木は「日曆」(第一号記念号・十二年七

月)の「日曆」の星雲」の中で、「日曆」の創刊の発端は、新宿の不二屋の二階で、大谷藤子さんから小生が相談を持ちかけられたことから始まる。

「どうでせう。一肌ぬいて見て下らない。こんなうじうじした生活してゐても仕方がないですもの。雑誌でもあったら、きつと勉強し出すと思ふの。だから、その同人雑誌を出す計画を見て下らない。」と書いている。創刊当時、藤子も荒木も文筆一本で生活していたのである。「日曆」創刊号(八年九月)に「伯父の家」を発表。川端康成、武田麟太郎に認められ、「文学界」に「信次の身の上」(九年一月)を、「芸芸」に「一つの展開」(九年四月)を発表する。つづいて「改造」の懸賞小説に当選した「半生」が九年八月号に発表され、新進作家の位置が確立する。この時のことを、藤子は「私事一つ」(「芸芸」九年九月)の中に次の様に書いている。私は小学校を卒業するまで、その子供時代を秩父の山奥で暮らした。

人間の成長と言ふものが、はかり知られない変化をもつものであるにしても、そこに過去をとりぞくことは出来ない気がするのである。私は作品の人物を描く場合に、このことを考慮に入れておきたいと考へるやうになつてゐる。「半生」では、そんな気持ちで勉強した。

藤子は「心を両神に置くと、なにかしら落着いて仕事が出来ると」言い、郷里秩父の山村の自然と生活を、堅実な客観的写真で描き、数々の作品を誕生させる。「須崎屋」を「改造」(十年一月)、「血縁」を「中央公論」(十年十二月)に発表。十一年五月に矢田津世と満州旅行。十三年十二月、「須崎屋」を刊行する。十四年三月に「山村の母達」(「改造」)後単行本では「山村の女達」と改題)を発表。十七年五月に網野菊と再度満州旅行。二十年春、外秩父の大野村大野にある母の実家森田家に疎開し、敗戦を迎える。

戦後、「谷間の店」(「人間」二十一年四月)を発表。二十二年二月、「谷間の店」を刊行。「妻の戒名」(「改造」二十六年三月)、「釣瓶の音」(「改造」二十七年十二月、第五回女流文学賞)を発表。三十四年八月、「青い果実」刊行。三十五年六

月、「断崖」刊行。「判決まで」(「新潮」三十八年十一月・後「最後の客」と改題)を発表。四十三年十一月、「最後の客」を刊行。「再会」(「新潮」四十四年八月・第九回女流文学賞)を発表。四十五年十二月、「再会」を刊行する。発表作品の最後は「姉とその死」(「新潮」五十二年十一月)である。藤子は五十二年十一月一日、七十五歳で死去したのである。墓は故郷神村の生家の墓地にある。戒名は「芸芸院故郷妙藤大姉」である。

藤子没後六年の五十八年十一月一日、藤子の墓のすぐ近く、生家の前に「大谷藤子文学碑」が建立される。碑文は「山村の女達」から、

日の出が迫つたらしく、そこ、の蜘蛛の巣が急に美しい線を描き、宿った露がきらめきだした。ほんの気づかないほどの間ではあるけれど、あたりがぱっと蒼白く冴え、陰影が東の山の根にたちこめて、その陰影のこもった山は、奥深い、はかり知れないやうな大いさを見せた。

とある。

(日本ペンクラブ会員 榎本了)

東西南北

県立浦和図書館

●夏休み子供科学映画会

日時 8月8日(木)14時

内容 敵の目をくらます昆虫たち／魚のそだちかたーサケー／虫さがしーバツタやコオロギー

●記録映画会ー古代の謎をさぐる

日時 8月10日(土)14時

内容 東洋のガラバゴス／パレオバ

化石動物ー飛行の伝説ーナスカの地上絵ー

●科学映画会ー暮らしと食品ー

日時 8月22日(木)14時

内容 食品の安全性を追求するーふ

だけの食卓／酒と健康

●名作映画会

日時 7月27日(土)14時

内容 イーハトープの赤い屋根

●県立熊谷図書館

●名作映画鑑賞会

日時 8月3日(土)10時／14時

内容 原爆の子

●夏休みビデオ映画会

日時及び内容(毎回13時)

8月6日 南極物語

8月7日 2001年宇宙の旅

8月8日 太陽がいつぱい

8月9日 スターウォーズ

●子供映画会

日時 7月26日(金)10時／14時

内容 2人のローラ／ホップステツ

●定例映画会

日時 7月19日(金)15時

内容 奥の細道／深川芭蕉庵

7月19日(金)15時

●ビデオコンサート

日時 7月27日(土)14時

内容 ケイト・ブッシュビデオコレ

●名作映画鑑賞会

日時 8月24日(土)14時

内容 安全地帯ライブ

日時 9月28日(土)14時

内容 キース・ジャレット・ラスト

●名作映画鑑賞会

日時 9月7日(土)10時／14時

内容 彼岸花

県立川越図書館

●子ども映画会

日時 7月16日(火)10時／14時

内容 ふたりのローラ

●夏休み子ども映画会

日時 8月8日(木)10時／14時

内容 あんじゅとずしおう／クマの

プーさんープーさんと虎ー

日時 8月22日(木)10時／14時

内容 がんばれ子供交通安全パトロ

ール隊／竹取り物語

●県立久喜図書館

●夏休み親子映画会

日時 7月27日(土)10時／13時30分

内容 パパ・ママ・バイバイ

日時 8月24日(土)10時／13時30分

内容 北極のムーシカ・ムーシカ

●夏休み子ども映画会

日時 7月25日(木)13時30分

内容 アリとキリギリス／うそつき

日時 8月8日(木)13時30分

内容 なまはげだぞう／やさしいラ



イオン／マヤの一生

日時 8月29日(木)13時30分

内容 田舎ネズミと都会のネズミ／

くまのプーさん／牧笛

●映画会

日時 9月12日(木)13時30分

内容 奥の細道の世界／深川芭蕉庵

日時 9月26日(木)13時30分

内容 日本のアンデルセン／源氏物

語の世界

●ビデオコンサート

日時 8月1日(木)12時15分

内容 ザ・フー

日時 8月22日(木)12時15分

内容 歌劇「マノン・レスコー」

日時 9月5日(木)12時15分

内容 ロックショー

日時 9月19日(木)12時15分

内容 JS パッハー・フランデンブル

ク協奏曲

●会場の記入がない場合は、いずれ

も主催館(■印)が会場となります。

詳細は県立各図書館へお問い

合わせください。

県立浦和図書館(四八〇・三二六三)

県立熊谷図書館(四八五・三二六二)

県立川越図書館(四八二・四二五三)

県立久喜図書館(四八〇・三二六九)

炎の谷―秩父事件始末記 下山二郎
国書刊行会 昭59
火の種蒔き―1884年秩父事件
A・コルベジェ あかし書房 昭58
写真で見る秩父事件 井上光三郎
品川栄嗣 新人物往来社 昭57
秩父困民党紀行 井出孫六 平凡社
昭53 (平凡社カラー新書)
秩父事件を歩く 戸井昌造 新人物
往来社 昭53

5・山の紀行
秩父Ⅰ―Ⅲへ清水武甲著作集 言
叢社 昭58
秩父学入門 清水武甲監修 さきた
掌編埼玉文学散歩2 秩父路 榎本了

ま出版会 昭59
秩父市から見える山 藤本一美 図
一枚もの 昭54
秩父の峠道 目下部朝一郎 木馬書
館 昭56
秩父へ写真集 南良和写真 井出
孫六文 家の光協会 昭53
秩父日記(埼玉県立図書館復刻叢書
ハ) 渡辺渉園 昭59
奥秩父 原全教 木耳社 昭52
芭蕉句碑を歩く―埼玉の一〇四基
小林甲子男 さきたま出版会 昭58
秩父の文学紀行 斎藤廣一 養神書
院 昭49

さいたま豆本の会 昭51
私の秩父地図 井出孫六 たいまつ
社 昭54
ふるさとの文学・秩父の文学をたず
ねて(パンフレット) 昭59 県立
四階には、館外貸出用として各50部
備えてあります。御利用ください。



この「図書館だより」は、県立四館共同
の館報として、各館代表一名の編集委員に
より編集いたしております。今年度は、二
館の委員が変更されました。新鮮さも加わり
皆様の期待にこたえる「だより」を発行し
たいと思います。
今回から埼玉の文学は、小説家にスボッ
トをあてました。昨年度に続き、榎本了先
生に御執筆をお願いいたしたくことになり、
御厚意に感謝申し上げます。
ところで今年は、梅雨時期には珍しい、
台風が埼玉を通過しました。
被害はございませんでしたか。
第二十四号がお手元に届く頃は、梅雨も
明け、まぶしい日さしの季節の到来になり
ます。健康には十分注意して、良い夏をお
過ごしください。

編集後記

おたすねください

問 ラムネの盛衰について知りた
いのですが。
答 ラムネは、アイスクリームや
レモン水とともに日本で最初に広
まった伝来清涼飲料の一つです。
これが日本で商品化されたのは明
治元年で、サイダー(明17)、ソー
ダ水(明34)、コーラ(大8)などに
先がけて広まりました。
伝来したのは、それよりさかの
ぼって、横浜開港(万延元)まもな
く、とする見方がおおよそのとこ
ろです。
当時は経験によって、一本づつ
詰めては手加減でガスや香料など

の工合を調整しました。邦人初と
されるラムネ屋、洋水舎は、中国
人の店でこの製法を学んだ鈴木音
八によって、明治14年頃開かれま
した。
こうしてラムネは次第に日本人
の生活に入ってくるわけですが、
飲み水との関連で、コレラの大流
行(明19)がその普及に拍車をか
けたようです。
ラムネ普及の様子は、当時のニ
ュースの見出しでもうかがい知る
ことができます。
「日本ラムネ会社設立、新機械
を注文」(明21)、「蒸溜水だから衛

生上無害」(明23)、「京都で流行」
(明23)、「不良品取り締まりを強
化」(明32)。
ところで、当初のラムネには、
胡瓜びんが使われていました。玉
入りびんに変ったのは、明治30年
頃です。そして、この頃は、ちょ
うどラムネの大流行の時期でもあ
りました。
しかし、やや高級な飲料として
のサイダーに王冠栓がほどこされ
る(明37)と、ラムネは次第に押さ
れ、大正末期頃からは、子供相手
に売られるようになりました。

参考文献
「事物起源辞典」 朝倉治彦ほか
編 東京堂出版
「話の大辞典」 日置昌一著
名著普及会
「発明発達の研究事典」 山田真
一編著 小峰書店
「明治ニユース事典」 毎日コミ
ュニケーションズ
「日本の食物史」 安達 巖著
同文書院
「明治工業史」 日本工芸社著
日本工芸社明治工業史発行所
「近代日本総年表」 岩波書店